



Tatsumi Iwaki
岩城辰美さん(赤池)
いわき・たつみ 昭和30年から、雨の日も雪の日も街頭に立ち交通誘導を続けている。ボランティア歴52年で数々の表彰を受ける旧赤池町の名誉町民。今月26日で93歳を迎える。



歩道橋を渡り終えた児童の挙げた手に、そっと応える岩城さん。やさしいまなざしで見守り続けています。



通学する生徒との何気ない会話も大切にしている岩城さん。「あいさつのできる子に悪い子はいない」と常々口にしています。

「自分のような障がい者を増やさないように」と毎日交通事故防止のために街頭に立ち、啓発と誘導を行っていた人と全国大会で知り合い、その活動に深く感動した岩城さんは、昭和30年から今まで、半世紀以上にわたって街頭での誘導を絶やさず続けています。これまで、県知事表彰や大臣表彰など、数え上げればきりが無いほどの表彰を受けました。

「最初に表彰されたときに、子どもたちが手紙をくれて、雨の日もいつも立って来てあげると、書いてもらった。その言葉を見るといつも涙が出るんよ。病院に入院したときには、一日も早くよくなってね」という手紙ももらった。そういう子どもたちの手紙は、もう何十年もたつが、ずっと

と宝物にしてるよ」と岩城さん。子どもは長生きの薬、子どもが長生きさせてくれる」と、今日も笛を口に、そっと左手を挙げて、学校へ向かう子どもたちを送り出します。

心づくボランティア

決まった形がなく、言葉で明確に定義することができないボランティア。何をもちてボランティアというのかは難しいところです。今回ご紹介した人のほかにも、町内にはさまざまな場面で人知れずボランティアをしている人がたくさんいます。もしかしたら本人すら、ボランティアだとは思っていないかもしれませぬ。いろいろな事情でやりたいことができずに困っている人もいれば、できる範囲で助け合おうとする人もいます。その根底にある心こそが、ボランティアの原点であり、真意なので



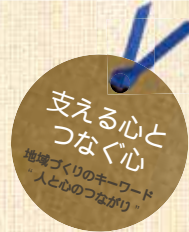
ボランティア活動は、無理なく、強制ではないことも継続するための大切な要素です。「こころ」のみなさんの活動も、できる時に、できる人が、自主的に集まっています。

はないでしょうか。ボランティア活動は、地域や人を愛し、感謝するという誰もが持っている気持ちを表し、行動にうつしたものだと思えます。一人ひとりがそうすることで、自然に助け合える町へと、少しずつ近づいていきます。

“人と人の心をつなぐ”がボランティアの心をよくみ、やがて行動という形に表れていきます。そして支えられた人の気持ちに感謝という言葉で返ってきたとき、その喜びがボランティアの次へのステップの活力につながっていきます。そこにはたくさんのお出合いと、出合いの数だけの感動が生まれ続けています。



8月21日の出校日、伊方小そばの通学路で。「こころ」は町内全域を対象に下校時の見守りを行っています。



Shizuko Mori

森静子さん(伊方)
もり・しずこ 事件事故から子どもを守るため発足した「こころ」の代表。現在は障がい者への支援など積極的在活动中。



見守りボランティア ニュース

「最初は、地域のかたへの恩返しという感覚でした。仕事上いろんな家庭を訪問しますが、ちよつと目を向けると困っていた人がたくさんいることが見えてきたんです…」

ボランティアグループ「こころ」の代表を務める森静子さん(伊方)。平成15年の会発足当時、子どもを狙った事件が多発していたため、まず通学路で下校する子どもの見守りを始めました。実は最初のころは、わたしたちが不審者と間違われたんですよ」と森さん。危険なのはやはり人気の無いところだと判断し、見通しの悪い場所に立っていると、子どもに驚かされて走り去られたこともあったそうです。地域でおなじみの「こころ」のトレードマーク、黄色いTシャツとキャップは、そういう誤解を避けるために作られたものです。以来、発足から4年がたち活動も定着。今では、Tシャツを着ていなくても子どもたちからあいさつをしてくれます。

そんな「こころ」の活動は、高齢者のごみ出しのお手伝いや電球交換などの身近なものや、障がい児の遠足の援助など多岐にわたります。遠足ではチャイルドシートを再利用したい子どもを乗せ、5人交



鷹取山の山頂で

代で背負い鷹取山に登りました。

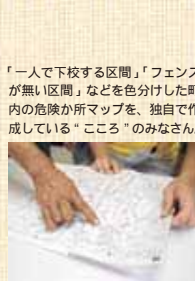
薄れつつある地域のつながり

昔は隣近所同士が顔見知りで、会えあいさつを交わし、子どもの危険にかかわるときは助け合えるなどして支え合っていました。しかし今は子ども会や補習の役員がやればいい、下手なことをすると文句を言われる…と、気に掛けてはいても責任転嫁し、結局は見えて見ぬふりをしてしまうケースが多いようです。そのような今こそ、地域の子もたちとのつながりを築くことが重要な課題となっています。

「地域との密な関係をつくり、みんなで自然に助け合えるような環境づくりのきっかけになればと考えています。改まってボランティア活動をするんだ!」というのではなく、昔のような助け合いができれば理想的です。よね、気にかけていても、なかなか一人では行動に移せません。そんな人たちが一歩踏み出して行動できるような場を作りたいです。」

「こころ」のメンバーは現在28人。当初は森さんの仕事仲間が中心でしたが、仲間を呼びボランティアの輪が広がっていききました。昔ながらの近所付き合いが希

薄な今、「こころ」の活動は、地域の人と人をつなぐ一つの場になりつつあります。



「一人の下校する区間」「フェンスが無い区間」などを色分けした町内の危険箇所マップを、独自で作成している「こころ」のみなさん。

人生を変えた出合いがある…

早朝から赤池交番前の交差点に立ち、車両や通行者の誘導を欠かさない岩城辰美さん(赤池)は、ボランティア歴52年の大御所。かつて30歳のときに不慮の事故に見舞われ、右手を失いました。その後、身体障害者福祉会の会長を務め、人生を変える大きな出合いにめぐり合いました。